

生活科についての「教材」とは

上越教育大学大学院学校教育研究科 教授 木村吉彦

はじめに

本稿では、生活科の教科特性からはじめ、他教科との違いを明確化することで、「教材」という用語使用について他教科との比較条件を設定する。次に、本研究会誌『学校教育 2015年4月号』からの「教材」用語記述を大いに引用し、生活科にとっては「学習材」用語が相応しいのではないかという考えを明示する。そして、児童の学習意欲を引き出す「学習材」設定、他教科とかかわりを引き出す「学習材」設定の事例を具体的に紹介し、生活科教材（学習材）のもつ「独自性」を明らかにする。最後には、児童主体の学習活動を基本とする生活科の在り方から、教師の役割について最終提案を行うことで、本稿の意味づけを確認する。

一. 生活科の教科特性

最初に、生活科についての「教材」を考える前に、生活科の教科特性を明記することで、生活科における学習材料を意味づけし、一般的な「教材」との比較の前提条件を明らかにする¹⁾。

(1) 子どもの(発達)実態に即す教科

従来教科には、必ず学問的背景がある。例えば理科であれば、物理学・化学・生物学・地学など、国語であれば、国文学・国語学などである。人類の知的財産を、子どもの年齢段階に応じて配列したものが、従来教科である。そこでの教師の主たる仕事は、知識・技能の伝達である。一方、子どもの課題の中心は、知識・技能の習得・復元となる。生活科以外の教科では教科書中心の学習指導方法であること、また、多くの場合には決まった答えがあること、この2点が生活科と他教科との教科特性の大きな違いである。

一方、生活科には、学問的背景がない。そのために、子どもの実態（何に興味・関心があるのか、どんな活動をしたがっているのか）を教師が理解・把握することから学習が始まる。「はじめに子ども理解あり」の世界である。生活科においては、教科書中心ではなく、体験と児童の主体性重視、さらには決まった答えのない学習活動である。

(2) 自分自身を学習対象とする教科

「自分自身」を学習対象とすることは、従来の教科では考えられなかったことである。従来教科の学問的背景が人類の知的財産ではあっても、子どもにとっては「外から」の課題だからである。それに対して、生活科では「自立への基礎を養う」という究極の教科目標から、「自分自身の成長への気付き」が最後の課題になり、自己認識が生活科教育の最終目標である。より具体的には、「わかるようになったぼく・わたし」「できるようになったぼく・わたし」に気付かせてもらいたい。そのことが、自己肯定感を引き出し、生きる自信につながる。しかし現在では、単なる主体性の育成だけで「自立」とは言えないのではないかと木村は考えている。より具体的には、相手意識（学習対象とのかかわりやクラスメイト等の人間関係）をもとに、「社会人としての独り立ち」を育てること

が「自立への基礎を養う」の意味である。生活科の場合、自分自身も含めて存在するのが学習材料なのである。

(3)体験を通して学ぶ教科～主観知と客観知の往復～

体験を通して学ぶとは、生活科が「自分とのかかわり」で自然・社会・自分自身について学ぶ教科であることを意味している。そこでは、主観的（個人的）な知識が尊重される。この「主観知」とは客観的な認識の基礎であり、従来教科の学力につながっていく。例えば、生活科の体験に基づき、作文シートなどへの文字による自己表現力を高めたり（国語）、アサガオの種を数えるようにしたり（算数）、飼育・栽培によって動物・植物への興味・関心が高まり、その後の理科教育への意欲に結びつく。このように、生活科は気付いて（気付かせて）終わりではない。同時に、グループ活動などを通して、自分自身の考え方だけでなく他者の活動や考え方を知ること、主観知のみに止まらず、自分の意見をより客観化できる状況が生まれる。「主観知と客観知との往復」によって、自分自身の問題意識が学習の必然性を生み、客観的な知識獲得の原動力となるのが生活科の教科特性である。

二. そもそも「教材」とは

今年度の『学校教育』においては、「授業における『教材』の意味付け」から提言が始まっている。北俊夫先生が、『学校教育 2015 年 4 月号』において学校教育の場面で「教材」という用語がどのように使われているかを整理してくださった²⁾。北先生の「教材」用語について木村なりにまとめさせていただき、生活科に相応しい「教材」用語とは何かを明記する。

(1)北先生による「教材」用語解説

- ①現行の学習指導要領においては教材と題材と事例等の用語が混在しており、教科等によって差異が見られる。統一したとらえ方が確立していないのが現状のようである。
- ②形態や形状からみると、教材に対する分類が次のようになる。まずは、印刷された教材として主要な教材は「教科書」である。教科等によっては「副読本」が使われている。さらには、教科書以外の図書その他の教材は「補助教材」と言われる。次に「視聴覚教材」がある。さらには、実物や現物の教材がある。以上から、教材にはその形態からして、「印刷教材」、「補助教材」、「視聴覚教材」、「実物 教材」に分類される。
「生活科の教科特性」でも述べたが、生活科の学習活動は教科書中心ではないことが原則である。しかし、児童達の学習意欲を引き出すために「副読本」として教科書を活用することが望ましいと木村は考えている。例えば、「おもちゃづくり」の頁によって児童達が「こんなおもちゃをつくりたい」という意欲が引き出され、主体性のある体験活動に導くことが可能となるのである。
- ③文部科学省の「教材整備指針」（平成 20 年改定学習指導要領を踏まえた）によれば、「発表・表示用教材」「実験観察・体験用教材」「道具・実習用教材」「情報記録用教材」の 4 つが挙げられている。教育用具である教具と教材とは、形態や機能において違いがあるにもかかわらず、教具と教材が混同されている、とのことである。
- ④「教材研究」における教材の意味について。教材研究とは、広義と狭義の二つの意味

合いで使われている。広義では、授業の在り方や進め方など授業について総合的に検討することである。一方、狭義の教材研究とは授業で使用する教材（題材）そのものをどう解釈するか、子どもに何を学ばせるかなど、教材の趣旨や価値などを分析・検討し、教材に対して理解と認識を深めることである。

このように、教材に対するとらえ方、教材の用語の使い方には、多様な実態がみられる。「教材とは何か」について、我が国において共通的な使い方が確立していないのが実情のようである。十分な定義づけがなされていない教育用語の一つであると言える。

(2)生活科に相応しい「教材」用語と今の時代

①「学習材」という用語

近年、教材に変えて「学習材」ということがある、という。教材とは「教えるために必要な材料」であり、これは教える立場からの用語である。それに対して、子どもの立場から、子どもが学ぶ際に活用する材料という意味で「学習材」といわれている。「教材」の内容や対象に対してより主体的にかかわらせ、学ばせたいという意図や願いを言い表したものと受けとめることができる。「生活科の教科特性」で述べたように、生活科では、教師主導で「教えたいたいもの」を一方向的に伝えるのではなく、体験や主体的な活動を通して児童が自ら「学びたい」という意欲を引き出すのが教師の役割である。そこには、決まった答えがないので「教える材料」とは言い難いのが生活科である。**生活科においては、「学習材」という用語がより相応しいのではないだろうか。**

②授業における「教材」の役割

北先生によれば、教材は、授業に先立って、主として教師の意図や願いにもとづいて用意される、という。子どもたちにとって、教材は、学習のスタート時点においてすでに存在している。一方、学習内容は、多くの場合、抽象度が高く、概念的であったりする。そのため、教師は授業において、学習内容を直接教え込むことはしない。学習内容を直接子どもたちに伝えても理解することはできないからである。そこで活用するのが教材である。授業において教材は、学習の主体者である子どもと教師が身に付けさせたい学習内容の間に位置している。教材は子どもと学習内容をつなぐ連結器の役割をもっている。授業とは、教材を活用しながら、子どもたちに教師の意図する学習内容を習得・獲得させる営みである。教師は子どもたちに教材を主体的にかかわるように導き、学習内容を身に付けさせることに最大の役割がある。授業は「子どもたちと教師との共同作品だ」と言われる所以がここにある、という。

生活科の教科特性（授業展開）からすれば、**ここでの「教材」という用語は「学習材」に匹敵する**し、他教科においても「教師主導」ではなく、子ども主体の授業展開を大切にする時代に入っていることが分かる。

③「教材」への豊かなかかわりをつくる

教材にかかわりながら学習内容を身に付けていく営みは、成長の過程にある子どもたちだけではできない。そこでは、子どもたちの興味・関心や問題意識を尊重し、子ども自身が学習活動をつくり出していくように導いていく教師の役割が大きい。具体的には、教材に対していかに興味・関心をもたせ、問題意識をどのように高め、いかに持続的に問題解決させていくか、そして、学習の成果をどのように見きわめるかである。そこで

求められるのが、子どもの主体性を尊重するという軸と、教師の指導性を発揮するという軸の両者のバランスである。そこでは、子どもについての確かな実態把握と、それに基づく対応力が必要とされる。

北先生は、「学び方を身に付ける」ための教材として「もう一つの教材」についても強調している。いま求められている「もう一つの教材」とは、子どもたちが調べ方、まとめ方、考え方、問題解決の方法、話し合い方など、さまざまな学び方や学習の仕方を習得するための教材（**学び方教材**）である、という。「学び方教材」の特質は、ア．教科等を特定することなく、あらゆる教科や総合的な学習などで広く活用できるという汎用性を持ち、超教科的な教材である。イ．また、必要とする子どもが、必要なときに、必要な項目を取り出して活用するという個別性である。学び方教材の活用には厳密な順序性がない。ウ．さらに、学び方教材で身に付けた学習方法に関する知識や、実際に活用することによって習得した技能は、これからの生涯にわたって学び続ける際に活用することができ、「一生もの」になる。学び方教材は生涯学習の基礎作りのための教材である。

生活科の教科特性からしても、「教材」という言い方よりは「学習材」の方が相応しいと木村は考えているが、この「**学び方教材**」こそが「**学習材**」に匹敵していると考える。

三. 生活科にとって相応しい「教材(学習材)」事例

生活科の教科特性から始まり、「教材」用語内容の分析から、生活科授業にとっては「学習材」という用語がより望ましいと思う。そこで、生活科に相応しい「**教材(学習材)**」事例は、具体的にどのようなものかについて実践紹介を行う。

(1)「いのちのアサガオ」

新潟県内において、かつて小学校1年生児童が白血病によって亡くなり、その時育てていたアサガオを母親が育て続け、そこでできた種を県内に配布していた。そこでのやりとりを踏まえ、平成9年12月に児童書(絵本)『いのちのあさがお』が誕生した³⁾。この絵本と配布されたアサガオの種を「学習材」として、次のような実践事例が小説に取り上げられている⁴⁾。

J市立T小学校は、このまちにあります。

あさがおのたねをまく、一週間ほど前のことでした。

「これからね、先生が読むのは、ちょっとかなしいお話なんだけど、コウスケくんという、みんなとおなじ一年生の男の子のお話です。」

一年二組のN先生は、一さつの本を手にとると、ゆっくりと読みはじめました。それは、白血病でなくなった、丹後光祐くんのことをかいた「いのちのあさがお」でした。

N先生は、それを三日間にわけて、みんなに読みきかせました。

じぶんたちと、おなじ一年生の光祐くんが、たった三ヶ月しか、小学校にかよえなかったこと…。さいごまで、むずかしい病気とたたかったのに、七才までしか生きられなかったこと…。そして、お母さんが、光祐くんのあさがおをたいせつにしていること…。

みんなのむねのなかが、光祐くんではいっぱいになって、教室はしーんとなりました。

なみだをうかべている子。くしゅくしゅと、鼻をすすり上げている子。じっと、目をとじて考えている子。読みおえた先生の見じりにも、うっすらとなみだが光りました。

「先生、コウスケくんのたねを、まいてみたい！」

立ちあがったSくんが、くりっくりの目を、さらにおおきくしていました。

「わたしも、あさがおそだてたい」「ぼくも…」「先生、わたしも」

つぎからつぎと、みんなの声があがりました。

「うわーっ、こんなにみんなが、コウスケくんのあさがおに思いをよせるなんて、先生、ちょっとね、びっくりしちゃった」

N先生は、むねがあつくなりました。一年二組、二十六人のひとみが、きらきらとかがやいて見えました。

以上のストーリーからして、生活科にとっての教材（学習材）とはくここではアサガオ>、「**児童にとって必然性のある学習材料**」であることが分かる。教師が設定した単元（朝顔栽培）について一方的に指示するく「アサガオ育てなさい！」>のではなく、目の前にある朝顔の種を意味付けることで、児童達にとって「自ら栽培したい」という意欲を引き出し、児童にとって自分自身の課題（内なる課題）として取り組めるように資料提供するのが生活科にとって重要な場面設定である。「いのちのアサガオ」とは、「**自ら学びたい素材**」そのものとしての「**学習材**」である。

(2)他教科とのつながりに結びつく生活科「学習材」

①算数「大きな数の数え方」

アサガオ栽培が2学期に入ると、一年生児童一人一人がアサガオの種の数に興味を持つようになる。子どもたちのそのような興味・関心の実情を踏まえ、ある担任教師は、算数「大きな数の数え方」単元の導入として、みんなで数を数えることにした⁵⁾。ここでも、児童達に担任が「アサガオさんの種がどのくらいできたか数えたくないか？」と質問すると、全ての児童が「数えたーい」と答えた。この場合でも、生活科体験に基づき、子どもたちにとっての必然性のある教材（学習材）であることは間違いない。

生活科におけるアサガオ栽培が児童にとって興味・関心の高い、しかも達成感を感じる自信の持てる体験であることから、算数という他教科の教材（学習材）となるのである。実際には、一年生児童たちは、最初から丁寧に一つずつ数え始めたが、やがて混乱し始め、「いくつあるのか、わからなーい」と言い始めた。すると、一人の男児が「僕ね、10個ずつまとめて数えたら、ちゃんといくつあるかわかりやすくなったよ」と発言した。すると、クラスの子どもたちは「そうか、10個ずつにすればいいんだ」と笑顔をもち、数え直し始めた。これは、十進法への気付きを意味する。こうして、客観的には算数の単元であるが、**生活科体験を基本にした教材設定は、事実上児童が自ら学びたいと考える「学習材」となることが分かる。**

②理科学習への興味・関心ー飼育・栽培による科学的な見方・考え方の基礎

ここでの事例はヤギ飼育である⁶⁾。実際に目にした現象からその原因を探ったり、因果関係に納得したりするという見方・考え方を身に付けるのに、動物という「学習材」はもってこいだと思われる。「行動や現象のわかりやすさ」があるからである。動物飼育の場合、気付きや知識・情報が実際の飼育活動に活かされなければ意味はない。「あれっ」という驚きと共に「なぜ？」と問うことで、毎日の世話活動に反映されることが大切である。この学級ではアサガオも育てた。「ぼく・わたしのヤギ・アサガオ」という思いを

持つこと、それは、外界の動植物を自然物とみなす前段階にある経験となって子どもの心に残る。一般の動物・植物と触れ合ったときのベースとなる経験であり、知識であり、興味・関心、好奇心の源である。3年理科の「自然探検」の先行経験になると、と担任は言う。自然認識の前提となる興味・関心の芽生えが観られたからである。自分の行為に対する変化・反応を目の当たりにして、子どもたちは達成感を持ち、これが飼育・栽培一般への興味・関心をそそる。低学年段階では、自分とのかかわりに基づく情緒的な満足感が、その後の自然現象・自然科学への興味・関心の原点である。自然とかかわることの楽しさ、面白さ、充実感・成就感を与える体験を「学習材」として提供することで、子どもの探究心を促す体験になれば、それが科学的な見方・考え方の基礎として子どもの中に意識化されるであろう。

③社会科学習とのつながりー地理&歴史の視点から⁷⁾

生活科における地域探検という「学習材」に基づき、気付いたことや印象に残ったことを絵地図に描く体験は、社会科での客観性の高い地図づくりに結びつく。それ以上に、町を歩いて人々の働く姿を目の当たりにし、お店や農家の人達と話をした経験は、地域への愛着や働く人々への関心を生み、3年生以降の社会科地理学習に結びつく。

一方、生活科での「成長単位」という「学習材」における「自分史づくり」を通して、低学年児童は自分自身の過去の事実を確かめることから（文字通り主観的である）今の自分を見つめ直し、これまでの自分や自分を支えてくれた人達を価値付ける。さらには、これからの自分の夢や希望、願いそして未来といったものを見出す体験となる。客観性の高い社会科歴史教育の前提として、生活科における主観的な思いに基づく自分史づくりは、児童にとって歴史教育の原体験を意味する。

低学年児童の育ちは、主観性を前提にしつつも、主体性と社会性を同時平行的に育てることで社会科学習が求める「公民的資質の基礎」に結びつくのである。

おわりにー「学習材」設定による教師の役割

最後に、生活科における教師の役割について提案する。日本語で「教育する」と訳される‘e d u c a t e’の元々の意味、それは「引き出しを開ける」という意味である。教育学の見地からすると、「潜在的な力を引き出して顕在化する」「内なる力や思いを外に出してあげる」、そして最終的には「子どもの可能性を引き出してあげる」ということになる。最新の指導要領改訂の文面にもある「潜在的な力を引き出す」とも共通である。生活科において最も大切なことは、子どもの思いや願い、興味・関心、意欲、好奇心、探究心等々、これら全てを「引き出してあげる」教師の姿勢である。従って、教師の心構えとしては、子どもに「教える」のみではなく、「学習材」をもとに「子どものもつ可能性を引き出す」ことである。木村は、ここで皆様に次の提案を行う。

‘Teacher’もいいけど、‘Educator’をめざしましょう！

◎引用・参考文献等

- 1) 木村吉彦「魅力ある生活科授業とは」広島大学附属小学校学校教育研究会『学校教育 2010 年 5 月号』 pp.12-13

- 2) 北 俊夫「豊かな教材観に立った授業づくりを」広島大学附属小学校学校教育研究会『学校教育 2015 年 4 月号』 pp.6~13
- 3) あやの まさる・さく, まつもと きょうこ・が, たんご まみこ・かんしゅう『えほん いのちのあさがお』(平成 13 年 6 月) ハート出版
- 4) 綾野まさる／作, 松本恭子／画『続 いのちのあさがお コウスケくんの青い空』(平成 15 年 12 月) pp.92-94, ハート出版
- 5) 木村吉彦『生活科の理論と実践－「生きる力」をはぐくむ教育のあり方－』(2012 年 3 月) pp.189-191, 日本文教出版
- 6) 同上書 pp.138-143
- 7) 木村 H P 「よっちゃんの部屋へようこそ」(sun-cc.juen.ac.jp / ~ kimurayocchan.htm) 第 6 9 番原稿